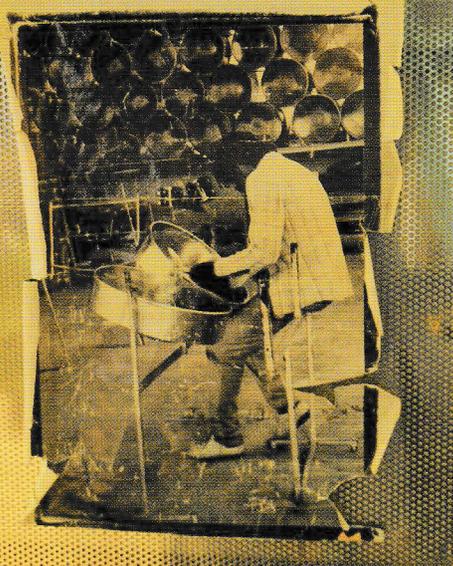


LIFE IN THE PANYARD  
(THE STEELAND YARD)  
THE HOME OF THE PANMAN



工場の壁に飾られた写真

換品を取ること求められ、様々なルートから商品を再輸入しました。それらも全て納品に値する品質ではなく、再度交換品を求められるという始末となりました。そんなやりとりが一年も続き、与えられた予算は全て使い果たしてしまいました。そして担当の先生から、納品していた三分の二の楽器も返品するので支払ったお金を全部返して欲しいと、最後通牒を突きつけられました。

試行錯誤を経て

私は、半ばヤケになり、開き直つてその申し出を即座に受け入れると、担当の先生は物の怪が取れたように穏やかになり、不良品の交換に変わる代替案を出してきました。それは、納品が完了していない三割の楽器を直せる人物を日本に呼んでみてはどうか？ というものでした。一瞬戸惑いましたが、友人の力を借りて思い切つて熟練の調律師を日本に招いてみることにしました。

ほどなくして調律師が来日し、三割の不良品を見事に調律してくれて高校の一件は落着の運びとなりました。このとき、楽器輸入業というのには正にギャンブルであるとまざまざと知らされました。

その調律師は名前をデンゼルといいます。彼は帰国間際になってこう私に切り出しました。

「この機会に俺からスティールパンの理論と実技を学んでみないか」という思いもかけない言葉でした。高校でのデンゼルの繊細で丁寧な仕事ぶりに感銘を受けていた私は、二つ返事で彼の講義を受けることにしました。二週間の講義を終えたとき、それまで私が思い込んでいたものが一気に瓦解していきました。スティールパンとは決して勘で作るものではなく、確立した物理などの理論に裏付けされた楽器だったのです。その瞬間に私は、この楽器の製作を自らの仕事にしようと深く決意していました。

その日を境に、ドラム缶を凹ましては音作りに挑戦する日々が始まりました。

納得がいく楽器が出来るまでは三年の月日が流れていました。

一九九九年からは茅ヶ崎市にあるアレセイア湘南中学校からの依頼でスティールパン製作を授業で教えるようになりました(昨年の三月で終了)。二〇〇〇年頃からは手持ちハンマーに変わってエアハンマーを導入し、月に三台くらいのペースで本格的に販売するようになりました。

その後、注文が途絶えることはなく、より良い楽器作りを追求しながら製作を続けました。

今から二年前位に大きな転機がありました。

某大学教授から一本の電話があり、円盤の振動実験を依頼されたのです。その依頼内容の説明を図面とともに教授から請けたとき、私はとても驚きました。そこに描かれていたものはあろうこと

か、スティールパンの進化系楽器「ハンドパン」に極似していたからです。もともとハンドパンの開発に興味があった私はそのオフアアを請けました。それからは、周波数や倍音などについて書かれた本を読みあさりしました。実験を重ねるうちにますますハンドパンの開発を進めたいという意欲がわいて来て、一昨年末頃からは本腰を入れて試作機を作り始め、諸課題を克服しながら、昨年四月には純国産のハンドパンの販売を開始する運びとなりました。

ハンドパンはスティールパンとは違い、鉄板に化学的な熱処理を施します。また、音盤となる面にはくぼみをつけることが特徴です。形状は、丁度二枚貝といった感じで、UFOを想起させます。スティールパンと倍音構造は同じなので調律方法にハードルは感じませんでした。独特の柔らかい音色を作る感覚はまるきり違うものでした。

昨年夏には、音色や弾き易さなどを改良したセカンドバージョンを発表しました。と同時にフェイスブックも立ち上げ、全世界へと情報を発信するようになり、数多くの注文を頂いております。ハンドパンはピアノなどと違い、例えばDマイナーのハンドパン、Gメジャーのハンドパンといったようにそれぞれに一つ一つのスケールを有しています。今後は、日本古来の雅楽などで用いられたスケールなども試してみたいと思っています。

今後もより良い音色を追求しながら、このハンドパンを発展させていきたいと願う昨今です。

そのべりょう 一九八八年千葉県生まれ。スティールパン、ハンドパン作家。スティールパン発祥の地トリニダード・トバゴの工房で製作技術を学ぶ。現在は東京・大田区に工房を構えて製作を続けている。二〇一二年には大田区が制定した「大田の工匠一〇〇人」に選定された。